

I はじめに

緊張とダイナミズムに何度も圧倒された。南北の合意と米朝間合意が成り半島に劇的な変化が生まれた昨年、11月18日から「今こそ韓国の平和運動から学ぼう、日本の憲法9条加憲論の危険と朝鮮半島の平和プロセスの実態」と副題されたツアーで私ははじめて韓国を訪問した。片や、失われた20年からの脱却を!、醜い憲法からの訣別による美しい国の再生をと称するも迷走と暴走のはてに進歩の方向感覚を失いすっかり停滞感ばかりとなった現在の「ゆで蛙」日本に照らすとき、半島のダイナミックな緊張に幾度もうならされた。その4日間をふりかえる。

II 本論

一日目は、成田ほか日本各地から今やアジアのハブ空港となった仁川へと降り立ち、そのまま大韓民国歴史博物館にむかう。視察と講演で詰め詰めのハードスケジュールの始まりだ。この博物館は近現代を対象とし、開国・独立運動期から光復節をへて現在の文在寅大統領までの歴代政権の歩み(1,2F)を、経済発展と民主化と国民的誇りの語りと織り合わせ(3,4F)展示する。安重根の遺文とアメリカ風制服姿の李承晩が印象に残る。東の裏口から入り小一時間の展覧を終えて西の正面玄関をでると、道の広さに驚く。ふりかえると8階建ての博物館はずいぶん通りから退いて立っており、そこに開けた空間のなんともゆったりした感じに驚く(——このとき私はこの博物館の志向も況やその地霊や地勢に不知のまま、ツアー企画者の笹木潤弁護士から北山をのぼった話をただ無邪気に聞くのみであった)。

東大門近くの電気街の一角にあるホテルに居を定め、講演にむかう。市民団体/NGO「参与連帯(People's Solidarity for Participatory Democracy)」本部・事務処長 Park Jeong-Un 氏の「我々のPSPDと韓国憲法の経験について」(通訳・宮内秋緒、以下同様)を聴く。安倍の9条加憲で何が変わるかを探るためでもあるこの企画からはまず二つ明確となった。①韓国の現況は日本と真逆であること。つまり、国軍を明記した憲法5条(大韓民国は国際平和に努め侵略戦争を否定する。2. 国軍は国家の安全保障および国土防衛の神聖な義務を遂行することを使命とし、その政治的中立性は遵守される)は、6条1(憲法にもとづいて締結公布された条約および一般的に承認された国際法規は国内法と同様の効力を有す)と相まって、事実上無制限の海外派兵に道を拓く。韓米安保条約およびACSA協定が韓国軍のベトナム・イラク・アフガン・ソマリア・UAE派遣を後押し、国会は米軍と協働する国軍の下請け、お墨付き付与機関へと成り下がっている。かくて60条(国会は相互援助もしくは安全保障に関する条約、重要な国際組織に関する条約、…、主権の制約に関する条約、講和条約、国家もしくは国民に重大な財政負担を負わせる条約、…、の締結と批准について同意権を有す。2.国会は、宣戦布告、国軍の外国への派遣または外国軍の大韓民国領域内における駐留について同意権を有す)は機能せず死文と化す。(保守)政府は「海外派遣法」案でいっそう拡大をめざす。②参与連帯は国会の改憲論議に対抗的に介入し5条2の文言「国家の安全保障」を削れと請願した、くわえて平和への権利の書き込み、国防・外交に市民参加と民主化をも要求中という。朴女史の講演は他に、参与連帯じしんについても言及。注目すべきは③PDSは市民団体の百貨店であり、政党版ならぬ市民版<影の内閣>であること。核軍縮/廃絶センターや子供権利条約関連の教育文化部門をふくむ18の部署からなり、横連携を可能にする5階建てビルを丸ごと所有するが、すべて市民1万5千人からの会費・寄付で運営され、200の専門家・55の常勤職員を擁す。政治家等公職者についての会員は直接の関係をたつ。驚くべき中立性、市民性の徹底ぶりには、講

演後案内された各階の活気ある様子とともに目を見張らされた。

<http://www.peoplepower21.org/English/39340>

二日目は朝から南下、世界最大の米軍基地(国連軍も一部に含まれる謎)のある平澤(ピョンテク)にむかう。ソウルの南区にあった「龍山(ヨンサン)空軍基地」を廃止しその在韓米軍司令部の移設先とされた巨大基地の茫漠さに圧倒されないように、まず Hyunn Phill-gyung 氏から平澤米軍基地還収研究所で講義をうける。180 万平方kmの干潟をうめ立てる基地拡張計画への反対を目的に2003年に創設され・週1回の監視をつづける市民団体、平澤平和市民行動ヒュン代表によれば、平澤は黄海に面す港湾を擁する内陸部のまち。激しく蛇行しつつ港にそそぐ河川域のいかにも肥沃で農業に最適とおもわれる(元)湿地帯にひろがる平澤米軍基地は、実は二つの隣接する基地、K55(世界最大、350万平方kmの Camp Humphrey)と K6(烏山 Osan Air Base)からなる。Kは Korean Base の略。世界各地160に散らばる約1300の基地を鳥瞰する視点からこそこの呼び名。K55にはベトナム戦で大活躍した1本の滑走路(拡張路2本付き)と並んで軍人軍属用のマンションのみならず映画館、アメラグ競技場のみならず小学校から大学サテライトまで完備。講義後、農家の屋根上から長く伸びた滑走路を戦闘機の爆音とともに遠望するとともに、農地収容で転居を余儀なくされ地元のにこった農民44世帯270名の人工集落とそれに隣接された平和センターの訪問、建設中の巨大マンション群をみる。K6にむかう途中、キャンプ外の軍属向けアパートに近接する歓楽街を通過後、急に増えはじめた激しく往来する無数のダンプに交じってバスは一時停止。掩蔽壁の向こう側、急ピッチで建設中の弾薬庫の作業現場をのぞきみして「なぜ、どうして中断しないのか」と疑問がわく。K6は川向うに静かに広がっていた。市民向けバス停もある小高い丘の上の通りからは、滑走路が一本と飛行機庫と小さな黄土色の平屋建てビルしか見えない。とそこで、Hyunn 代表が叫んだ「外観に騙されるな、氷山の一角だよ」と。地下5階建ての巨大バンカーに、40(?)キロ先まで感知可能な強力レーダーを有し・1千人がひと月こもることのできる地下指揮本部が設置されているという。

夕刻ソウルへ戻る。夕食会を兼ねてソウル大・外交学部/日本研究所の南基正(Nam Kijeog)教授との懇談会。院生時代に和田春樹氏のもとへ留学し最近松井ひさこ監督のドキュメンタリー「不思議なクニの憲法」に出演するが、理論家肌の学者だ。その南先生から、ASEAN+3 を経由して地球平和へと連なる「東アジア平和地帯構想とその実現にむけた連立方程式の解き方」とでも題せるミニ講義(参照、「小淵-金大中共同宣言(1998)意味と課題——歴史和解から平和構築へ」というペーパー。あるシンポの「第二セッション、文在寅政府の日韓関係ビジョンと政策」での報告文書2018.9.27を要約・図式化した内容の話)。

本日の堀尾報告(?)

南先生の報告に「韓国の知性」を感じる。巨大基地とその世界ネットワークに対抗する知性の仕事。優れたヒントをもらう。とりわけ、「連立方程式の定式化」と「その解法」の伝授に深く感謝する。

三日目 板門店のかわりに自由の橋と烏頭山統一展望台へ。

38度線の視察はとりやめ。地雷撤去や南北貫通の鉄道再開工事のためという。その手前の国境線近くめざして、それでもソウルから北上する。1時間もするとバス車内の左手に大きな河川域が見えてくる。もう半時間で「自由の橋」に到着。

自由の橋といっても自由の息吹は一瞬だ。1950.6月25日から3年間、半島全体を北から南、南から北へ、そして38度線へと軍事力の碾き臼ローラーが1往復半にわたり人々とその家族をひきつぶし130万余りの死者を出した朝鮮戦争の休戦協定成立時に、南北の捕虜交換をした橋にすぎない。いまは、望拝の塔から望郷の歌が奏でられる袋小路の橋だ。対岸への道は切断され、その壁には各国から寄せられたエール旗の奥に有刺鉄線がぐるぐる巻きに自由移動を阻止している。その鉄線は、「棘状」のいわゆるバラ線ではなく辺野古と同じカミソリ刃付きであることに気づく。朝鮮総督府と日本軍のおみやげという機関車が一両、朝鮮戦争での銃弾をあびて全身ぼこぼこに穴あきにされ無残な姿を断絶された線路の上でさらしていた。ここは不自由の橋なのだ。その近くで農業まつりが開かれ、軍事境界線ショップの子供用軍服の前を、徴兵制で徴用された軍服姿の若き国軍兵士たちが研修であろうか柔らかな顔つきで行き来していた。

そのあと、もっとはっきり対岸を覗ようと烏頭山(odusan)統一展望台へ。烏頭山はそもそも三国時代に高句麗と百済が国運を賭して百余年の戦闘を繰り広げた舞台。敗れた百済の亡命者が天皇家へとつらなることを思い一瞬感懐がよぎるが、現代にもどると、その山城跡の展望台(4F展望ラウンジの望遠鏡)からみえる対岸のケプン(開福)は、こちら側に誇示するかの如くいくつものモダンな白亜の建物がたちならぶ奇妙な農村風景であった。背後の山並みを遠望して、視線を眼下にうつすと、広大な汽水域から水が引けて中瀬が広がり、カニでも喰おうとしてか野鳥や猪の姿が散見された。長すぎる休戦がもたらしたこの予期せざる<生き物の宝庫>は、講和の暁にはそのまま<サンクチュアリ>にする計画もあるという。国境というものをしらぬ生き物たちの穏やかな姿が館内の、電子芳名録に刻まれた離散家族の悲痛、望郷と統一への想いを一瞬、忘れさせた。

3時すぎソウル市内。大韓民国博物館から南下した小高い丘の上にこの夏(11年間の準備の末に今年2018.8.29)オープンした植民地歴史博物館を訪問。そこに併設された民族問題研究所の対外協力チーム長、金英丸(Kim John Pha)氏の講演「ろうそく革命と市民運動について」を聴き・質疑応答後、2Fの展示を案内してもらう。展示は4つのゾーンで構成される。第一、第二、第三、第四、と観終わってハタと気付く——正史へ挑戦をしているのだ、それは学問的真理を賭けて、歴史資料=対抗アルヒーフづくりを足場にしての、歴史叙述をめぐる闘いなのだ、と。国営と市民営。同じ独立という主題を扱うにしても、故・林鐘國(イム・ジョングク)氏の親日派カード1万3千項目を継承しその記録の精神を2009年、4931名・全三巻の『親日人名事典』出版へと結晶させたという原点をもつこちらの歴史博物館は、偉人伝でもマスの繁栄物語でもなく下からの目線に徹する。おなじ被植民地時代を親日・抗日と別様の人生を送らざるを得なかった人々ひとりひとりをその分かれ目・動機を含め調査し、検察記録をはじめとする遺品・証拠品を収集している。そんな中、陸軍士官学校の制服をきた朴正熙青年の姿(写真)が私の目にとびこんできた。

独立運動/親日派の研究が一つの柱とすれば、「強制連行・強制労働の裁判支援」と「歴史改竄・国定教科書阻止」が実践面の2柱をなす。《東学農民戦争の「たいまつ」から現代市民革命の「ろうそく」へと連綿と受け継がれてきた独立の精神と民主の価値を守り、高めていく道の基礎を》提供すると博物館パンフは記す。金氏の講演は、2017の朴娘大統領弾劾へとつながった「ろうそく革命」を内情ともども語り明かした。ソウル市長は参与連帯の創始者のひとり。トイレ用意、終電車時間延長などの緊急施策でろうそくデモを背後から支援した。

展示案内後に合流した民弁米軍委員会の弁護士で脱北者支援も手がける Jan Kung-Uk 氏の講演「南北関係とその過去・現状・今後」をうけ、対話精神と背馳する「国家保安法」などが質疑応答で話題となった。改憲論争での「緊急権」導入論の批判的検討素材となろう。

4 日目最終日 尹東柱(ユン・ドンジュ)記念館と李韓烈(イ・ハニョル)記念館を訪問
構造と若きチカラ。巨大構造問題に向き合い、砕け散っていったふたりの若者。

III むすびにかえて

北岳のふもと青瓦台(BlueHouse)から見下ろされる

景福宮・光化門と米国大使館・日本大使館の間にたつ大韓民国博物館

大韓民国博物館と戦争記念館(元・龍山基地近く)の間にたつ植民地歴史博物館

前者博物館の前がろうそくデモの舞台。光化門広場と世宗路。

東アジアの行方と日本での 9 条を巡る攻防との関係

地球平和憲章キャンペーンへの示唆